



Relay Essay ポコポコ poco-poco 12

本当の豊かさとは
パキスタンの子どもたち、日本の子どもたち

田中裕子 / たなか・ゆうこ
グリーンコープ共同体 代表理事

昨 年秋からグリーンコープが
本格的な取り組みをはじめ
たファイバーサイクル事業の契
機となった、パキスタンの子ども
たちへの支援。その実状を知るた
めに、2011年2月、パキスタ
ンを訪れました。
スラム街やゴミ捨て場にある学
校、アル・カイル・アカデミー
では、想像以上に過酷な状況のな
かで、3000人近い子どもたち
が学んでいます。汚水が流れ込む
校庭や机も椅子もなくハエが群が
る教室、その中で子どもたちは熱
心に勉強しています。児童労働が
当たり前のパキスタンでは、半日
だけでも学校に通えるのは、まだ
幸せな子どもたちかもしれません。
実現はとても困難に思える将来の
夢を、それでも目を輝かせて話し
てくれた少女もいました。
パキスタンに身を置いて感じた
ことは、日本は、ほんどうに豊か
で、自由で、美しい国かもしれま
せんが、日本の子どもたちは、パ
キスタンの子どもたちのように熱
心に先生の話に聞き入り、将来の
夢を語れるだろうか……というこ

とでした。確かに、豊富な食べも
のや衣服、清潔な住居、そして学
ぶ場が当たり前のようにあり、そ
れを心配することなく暮らせるこ
とは幸せなことですが、当たり前
のようにあるために、幸せなこと
や感謝の気持ちを感じられなくな
っているのかもしれない。
日本の大学生がパキスタンを訪
れる際、親たちは、わが子に少し
は自分たちの生活を反省して欲し
いと願って送り出すそうです。け
れども恵まれていることを反省す
るだけでは長続きしない、自らの
豊かさを知り、そのうえで自分に
何ができるだろうかと考えること
が大切だと、現地で学生を受け入
れている方は言われていました。
パキスタンを訪れ、そこで目に
した過酷な光景と子どもたちの深
い瞳や、本当の豊かさについて考
えることができたことは、生涯忘
れることのない貴重な経験でした。
このエッセイを書き終えた直後、
東日本大地震が発生しました。被
災された方々に、心からお見舞い
申し上げます。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 12 2011.05.20

- 02 Relay Essay ポコポコ12 本当の豊かさとは—パキスタンの子どもたち、日本の子どもたち ©田中裕子
03 【特集拡大版】3.11後—この世界をどうつくりなおすか
APLAが考えること
【座談会】◎秋山眞兄、市橋秀夫、廣瀬康代、堀芳枝、村井吉敬、吉澤真満子、大野和興 / 03
山形より一光のある未来を自分たちの手で◎疋田美津子 / 08
フィリピンより一タルタルの丘から◎大橋成子 / 09
東日本大震災、そして原発事故について思うこと
—カネシゲファーム・ルーラルキャンパスにて / 11
12 【Column】
しらかが便り◎ タイトル◎疋田美津子
むらを歩く12 消えた村◎大野和興
まだまだ韓流◎ ラブコメで描くユニークな政治ドラマ『シティーホール』◎津留佐和子
Have you ever seen the Cinema?◎ 『カッコーの巣の上で』◎重政栄一郎
14 【Voice from APLA partners】
APLAの仲間たちからのお見舞いメッセージ
15 事務局便り

表紙の
ことば

今からちょうど10年前、高校卒業祝いとして父と二人でベトナム旅行に行きました。父は同僚から、「18歳の娘さんと海外旅行なんていいですね!」と羨ましがられたそうです。

行く前から買い物好きな父と二人でいろいろな情報を集め、ホーチミンのマーケットで布を買い、現地にいる間にベトナムの民族衣装アオザイを仕立ててもらいました。周辺のアジアの地域でもそうですが、高い職人技で作られるオーダーメイドの服は、自分の体型が変わらない限り長く着つけられます。問題は10年を経た体型の変化。最近しばらく着ていないけれども、きっとまだびったりははず!と信じています。

きつくなったら、選暦を迎える父とまた作りに行くのもいいかなと思っています。祝う立場がいつの間にか逆転した父娘ですが、旅行中と変わらずいつまでも仲良くしたいものです。(黒澤仁美)

特集拡大版

APLAが考えること

3.11後—この世界をどうつくりなおすか

これまで確かだと思いついてきたものが足元から崩れていく……。3月11日、東日本を襲った大震災は、そんな思いとともに、人びとの記憶に刻み込まれた。世界一といわれる大堤防があつという間に押し流され、何が起つても安全と多くの人が信じ込まされていた原発が暴走を始めた。この事態は国内だけでなくアジアにも衝撃を与えた。今、根っこからこの社会や暮らしのあり様を問い直そうと多くの人が考え始めている。ではAPLAは何ができるのか、何をしなければならぬのか、東京、山形、ネグロスからの声を送る。(編集部)

【座談会】

- 〈座談会参加者五十音順〉
APLA共同代表 秋山眞兄
APLA理事 市橋秀夫(埼玉大学准教授)
APLA理事 廣瀬康代(生活クラブ組合員)
APLA理事 堀 芳枝(東京女子大学准教授)
APLA共同代表 村井吉敬(早稲田大学教授)
APLA事務局長 吉澤真満子

大野和興(司会・本誌編集長)◎3月11日、とつともない大震災が東日本を襲った。福島では原発の暴走が始まり、それは今も続いている。東日本大震災と名付けられたこの出来事は、世の中の仕組

み—経済、社会のシステム、暮らし方、生産の仕方、科学技術のあり方など、私たちがこれまで依拠してきたすべてに問い直しを迫っていると思う。この座談会では、APLAとしてこの状況をどうとらえるか、どのような課題が私たちに突きつけられているのかを探り、APLAのこれからの活動の方向を考える材料にしたい。

アチエでみた支援被災

村井◎2004年末に発生した北スマトラ沖地震(M9.3)は、今回の地震よりもっとスケールが大きく、インドネ



宮城県名取市の津波被害。

シア、インド、タイなどで合計22万人が、アチエでも17万人が亡くなっている。知り合いがたぐささんというこゝでは、私にとってはより切実だった。だからむしろ、今回の震災後の日本社会の対応の仕方に気にかかることがある。なぜ震災後にみんながこんなに優等生のような「心温かな思いやりあふれる日本人」に急に変わったのかなと。皮肉ではなくて、何か怖い感じがする。対応の方向性が一律になりすぎているのではないか。

北スマトラ沖地震について言うと、震災の2ヶ月後くらいに行つたアチエで、援助・支援活動の洪水によって、かに第二の被災、つまり支援被災が起きていったかを目の当たりにした。きっと日本でも同じことが起きてくると思う。緊急支援について否定するつもりはまったくない。しかし、1ヶ月経つと、被災した人がどういう生活をしていくのか、ということが焦点になつてくる。そこに見通しも何もないままにお金やモノがあふれる状況になるはず。そうすると、支援しているNGOや地方自治体が全体を仕切ることに、本当に被災して苦しい人たちのところには何もいかな、ということになりかねない。

原発について言うと、植田敦さんが



堀 芳枝 / ほり・よしえ

1978年に書かれた『石油と原子力に未来はあるか―資源物理の考えかた』（重紀書房）という本を読み、いたく感激したことがあった。彼は1960年くらいから十分だという提言をしている。これからの社会づくりを考えるとき、昔にただ戻るだけでなく、植田さんがいうようなエネルギーの使い方、農や漁業、暮らしそのものを新しく作っていく原点にできる可能性がある。

私も当事者になった

堀◎私は右肩上がりの成長を享受して、ずっといい時代をすごしてきた世代。大学生のときには「一億総中流」という言説が圧倒的で、「格差」はフィリピンやインドネシア、タイなど国境の外にあった。60年安保も学生闘争もベトナム戦争の反戦運動も……話を聞くだけで、共感しても、自分のことではなかった。90年代に入ってから国内にも「格差」の問題や滞日外国人の問題が出てきた。それでも自分は当事者ではなかった。今回の3・11は、自分が当事者になった初めての事件だと感じている。

私は6歳の子どもを抱えていて、地震のときは3時間かけて保育園に迎えに行った。一時はその子の安全を考え、管理する方向に動き、例えば集荷トラックには関係者以外乗せないとなっていく。でも、フィリピンの山奥でそれをやったら、地域の人たちがお金を払わずに町に行く手段が失われる。それは同時に人間関係も失うことにつながる。そのように機能していたものが大きなシステムに組み込まれて変質すると、人間関係が弱くなり、今度はシステムが壊れたときに自分たちでは対応ができなくなる。

個人的には、2歳半の子どもがいるので、水と食べ物のが気になる。東京都が水道水汚染の発表をしたときはやはり慌てた。千葉県の成田から有機野菜を直接購入をしているが、原発事故後には、送られてきた野菜と一緒に「自分たちは放射能を計る機械を持っていない、今のところどうしようもできない。色々な情報を判断しながら、自分たちで安全の確信がもてなくなるまでは野菜を送ります。でも心配な方は遠慮なく断ってください」とい

熊本県水俣まで退避した。自分のことよりも次の世代の子が被曝しないことを一番に考えた2ヶ月だった。

これまでは原発ではあっても、原発を建てることに正面切って反対してきたわけではなかった。しかし、今回の原発事故で思ったのは、爆発する危険性が常にあるなかで、日常的に被曝する危険性ももたながら働いている下請けの人たちがいることに目をつぶって今まで電力を消費してきたということ。今回は、原発の悪影響が自分たちの身に降りかかりそうになってきたから危機意識が高まっているのであって、実はこれまでの日常の中にもずっとあった問題だったのに、それを他人に押し付けてきたんだな、と反省した。考えてみると、水・電気がないというのはフィリピンでは普通のこと。ある程度生活が不便になることは覚悟してでも、原発を訴えていかなければなら



2005年3月13日、インドネシア北アチェ州マタン・バル村被災後NINDJA(インドネシア民主化支援ネットワーク)が漁民支援のために贈ったエビ獲り網を早速使う。



村井吉敬 / むらい・よしのり

システムが壊れたら何もできない自分

市橋◎ぼくは、震災があった日はフィリピンのネグロスの山奥にいた。パラゴンバナナの産地を訪問し、零細のバナナ生産者や地域をオーガナイズしているフィールド・アシスタントと呼ばれる集荷の責任者たちに話を聞いていた。そのとき自問したのは、「自分で苦労して稼いでいるかどうか」ということだった。ぼくは就職してからずっと、定期的に給料が入る立場にいる。一方で生産者やフィールド・アシスタ

は神戸一帯だけだったが、今回は東北が大きく被害を受けているので、今後どうなるのかと心配している。東北は関東の私たちが日頃食べている食料をつくらせている地域なので、来年のお米や野菜の問題もあるだろう。TPPがあるじゃないか、という話になってしまわないか、それが一番の不安。また、私が通う自然食品屋さんには「エクアドルのお知らせがあった。バナナは船の上にあるのに、ドイツ船舶なので日本に入港できない（放射能汚染を避けて日本への）。更には、野菜の放射線量を測る方法がないから、今後は西の生産地にシフトしていくしかないだろうと聞いた。そのような状況のなか、放射線について様々な情報が錯そうしているように思える。20年後、30年後に影響が出るのであれば、小さい子どもはどうすればよいのか非常に心配。原発の問題が重くのしかかっている。

今までは、節電しよう！と言ってもなかなかできなかったが、電力が供給できないと言われれば人は真剣に節電できると実感した。しかし、同時に電気がないのは弱者の人にとって大変

気づいた。例えば、ぼくが話を聞いた人たちは、バナナがなくなっても食べていける。バナナはたまたまそこにあったのでそれを利用しているというだけだ。そういうものが日本での自分の生活には欠けているなあと感じた。システムに乗っかっているからぼくなんかも生きていられるけど、いったんそれが壊れたときにどう生きていくのか。ぼくは、80年代前半から中ごろに演劇運動と同時に原発運動にも関わっていて、自分たちの演劇グループが原子力資料情報室の団体会員になったりもしていた。なぜ途中で原発への関心が薄らいでいったのか……。そんなことも考えた。クーラーを使いはじめたのはいつだったかとも思った。最初のころは「使わない」と思って何年かそうしていたけれど、最近は暑いとつけてたまま寝てしまっている。職場である大学も、独立行政法人になる前にはクーラーはなかったが、今は冷房なしの夏場の授業は不可能だとみんなが思っている。

同じ流れで、バナナのことも思った。実は、バナナの集荷用のトラックは、地域の人たちを無料で乗せるなど、地域の役に立っている。そうしたなかバナナに異物が入っていたので対策が必要だという話になると、流通を厳重に

だと気づいた。スーパーに行くと、暗いとモノが見えづらい。駅でもエスカレーターがあるのが普通だった。障がいを抱えている人も享受できていたことが多くあったのだろう。電気が使えないとなったときに、そういう人たちに優先的に使ってもらおうのが「優しさ」だと思っただけで、募金することだけが「優しさ」のように思っている。

本気で原発反対運動をしたのだろうか

秋山◎地震当日は、ノルマ・ムガールさん（オルター・トレード社社長）が来日していて、車で千葉県に行っていた。行き先がアクアラインを通ったとき「ここで地震が起きたらどうしよう……」とノルマさんが話していた。東京へ戻ってくる途中で地震に遭遇、道路の渋滞がひどく、まったく動かなかった。

ノルマさんが即座に言ったことは、「日本人は我慢強くておとなしい」ということ。フィリピンだったら、みんながクラクションを鳴らして大変な騒ぎだし、モノの略奪も始まるはずだ。しかし、その後の事態を見ていると、おとなしすぎるという気がする。原発の問題に対してもっと怒ってほしいんじゃないか。それだけ日本は見えない管理というか、ソフトファシズムのな

東北は食料を作ってもらっている地域

うお知らせが入っていた。こういう事態になったときの支援関係、お互いの関係をどういうふうで持続できるのか、というのは大きな問題として心に引っかかっている。

廣瀬◎11日は、息子が都内から神奈川県のお宅に帰ってこられなくなり、都会は電気がなければ機能しなくなると実感した。6時間歩いて帰ってきた息子は、歩いている人たちに對して「ここにトイレがあります」と声をかけてくれる人がいて、自分とは無関係な間柄なのに、なんて素晴らしい人がいるんだらうと思ったと話していた。

私は関西の出身なので、阪神・淡路大震災の2ヶ月後に一度実家に帰っており、作られたものをこれほど大きく壊す自然の力に圧倒された。あのとき

かに置かれてきているという気がする。復興に関しては、今までと違う考え、知恵を働かさないと……と言う気がする。今思えば、原発運動をやったきりでは、いいほうがいい。くらの認識でしかなかったことを思い知らされた。正直、チェルノブイリや今回の事故が日本で起こるとは考えていなかった。

第1次氷河期世代の自分

吉澤◎私が大学生活を送り始めたのが90年代半ば。就職氷河期と呼ばれる時代だった。モノがあって豊かで、何でも



市橋秀夫 / いちはし・ひでお

ことだった。今回の原発事故を見て、日本のような形での進歩の問題性をフイリピンは若者はわかってくれたのではないかと思う。一方で、ではどうするかとなる。APLAが関係している生協ひとつとついても、コンピュータ制御による注文システム、電気をつかったベルトコンベアーによる仕分け作業、巨大道路網による流通などの大インフラによって成り立っている。自分たちに近い組織である生協がどう考えているのか、今回のことをどう捉えなおすのか、それについてももう少し知りたい。例えば「これは福島県産だから60歳以上の人は買ってください」というようなことは、町の八百屋だったらできるだろうが、生協の宅配システムではできないのではないだろうか。

村井◎今回の震災を機に日本社会が簡単に作りかわると思わない。TPPも6ヶ月後に復活している可能性は大きいし、東電だって2年後にはまったく違う形で復活していくだろう。さつき吉澤さんが言った経産省と大企業という大権力構造自体がこの震災によって変わると思えない。それを変えるには相当の闘いをしなくてはいい。もちろん闘うにはいいチャンスだ

も手に入りそうな日常のなかで生きているが、何か停滞して落ちていくというギャップを感じていた。ここ数年では、だんだん同年代でも食べていけないという人が出てきて、国内の格差が目に見えるようになってきた。今回の震災と原発事故では、感じていた色々な矛盾が可視化された気がしている。原発のことで言うと、例えば、経産省と大企業が社会の大きな仕組みを牛耳っていたということが明らかになった。これまでもわかっていたつもりではいたが、その壁の厚さを改めて見せ付けられている気がする。

色々な人が今がターニングポイントだと言っているが、APLAや様々な市民運動が言いつづけてきたことが、ここで生かされるのかどうかこれから問われるのではないか。2006年に公開された『六ヶ所村ラブソディ』というドキュメンタリー映画があって、同世代の中では、それによって原発問題を身近に捉えるようになった人たちがいる。電気のことを考えたり、ライフスタイルを変えていこうというような感覚が、ムーブメントとして広がりがつづいているのを感じていた。APLAと一緒に活動している上の世代の人たちがしてきたこと、そうした動きがなかなかリンクしないけれど、本

とは思う。これまでの我々の闘いは不十分だった。それぞれの現場でみんなが闘うことこそが大事だと思う。APLAはAPLAの現場があるわけで、ネグロスや東ティモールやアジア各地でやってきていることをもっと強くやっていくこと、実現していくことが我々の闘いだと思う。

地域に主導権を

大野◎今回見えてきたことの一つに「国家というのはなんだろう」ということがある。自治体、市町村がしっかりとしていれば国家はいらないのではないか。地域こそが小さな仕組みを再生する現場なのだろうと思う。

村井◎ぼくは、元々国家はいらないと言いつづけているけれど、今回の公共広告機構(AC)のCMは「ニッポンニッポン」と本当に耳障り。日本人だって千差万別で色々な人がいるのに、こんなときだけ一つになれるわけがない



廣瀬康代 / ひろせ・やすよ

この世界をどうつくりなおすか

当は同じことを思っているんじゃないかと感じていた。そこをいかにつなげられるかというのがポイントなのではないかと考えている。

震災直後からAPLAは、JCN C時代からの経験も踏まえ、緊急支援ではなく、新しい時代をどうつくるか、という中長期的なことに関わるはずだとは思っていた。それでも、色々な団体が被災地に向かい、周囲が「支援だ、支援だ」と動いていくなかで、APLAは何もしなくていいのか、と焦燥感を感じずにいられた。最初にぐさぐさときたのは、有機農業をやってきた農家の人が自殺したニュースを聞いたときだった。どうにもいたたまれない気持ちになった。ネグロスと日本の農民交流の中で、農民にとつての「土」の話を何度も聞いてきたけれど、年月をかけてつくってきた土が放射能汚染により一瞬にして奪われること、その人の人生や生活の営み、地域の文化など、すべてが奪われてしまうということの意味を感じずにはいられなかった。雨が降って東京の水も影響を受けた。水ひとつとっても、大きな自然のサイクルの中で自分たちは生かされているのに、それが自分とは切り離されて、いつの間にか見えなくなってしまうっていったんだなど気づかされた。



秋山真兄 / あきやま・なおえ

はずで、大震災ナショナルリズムは非常におかしいと思う。国家が復興を全部管理しようというのもすごくおかしい。各地域にいるんなら特性があるわけで、それぞれの地域に生きる当事者たちが考えるべきだ。国が復興を一律に考えたら、これまでも同じシステムを拡大再生産する以外にないだろう。

市橋◎復興を誰が進めるのかという話に関していえば、地域が主導権を握って、大野さんが言われているように、大きなシステムに代わる、小さな仕組みをいかにやっていけるかが鍵だと思う。そうしないと、山を全部削って津波に耐えられる住宅街を作り、より効率のいい電気配分の仕方を電気会社で作って……と、それこそ町ごとオール電化みたいな話になりかねない。

堀◎結局私たちは大企業に頼らないと生きていけないように、知らず知らずのうちに飼いならされてきたのではな



大インフラで動いている現代の日本社会

大野◎皆さんからエネルギーと食の問題が出されてきた。そしてそれをつくりあげている今の巨大システムについても言及された。その巨大システムが壊れると何もできない。まずは、暮らしの根底を支えているエネルギーと食を、この3・11以後の状況を踏まえて、どのようにつくりなおしていけばいいかに論点を移して具体的に考えていきたい。

秋山◎この間ネグロスの若者とずっと話してきたことは、自分たちの地域・集落の中で、食料とエネルギーをできるだけ自給することをめざそうという

だろうか。そのシステムが壊れたから大変だ！と今騒いでいるような気がする。ここまできたら「低成長」でのらりくらりやっつけていくしかないんじゃないか。フィリピンに倣って、朝早く起きて仕事をして、暑い時間は休む、とか。

市橋◎人間関係が見えないとシステムをガチガチにしていく方に動いてしまっている。日本は、リスクを少なくしていくということだけでやってきた結果、大きなリスクには逆に耐えられないほどになってしまった。そういうことが今回ではつきりした。

小さな仕組みを取り戻す

大野◎食べることについては先ほど出たが、つくるといふことに関してはどうか。

村井◎今日(4月7日)の東京新聞に一枚の写真が出ていた。それは、被災した漁民が七輪でイワシを焼いているというすごくいい写真だった。一方で漁民が魚を獲れなくなって被災者でしかない、という状況は一番つらい。漁民は魚を獲る民。だけれど、日本の漁業とぼくが歩いてきた東南アジアの魚を獲る現場では、大きな差がある。アチェ



きびの草取りを行う筆者(右)としらたかノラの会のメンバー。

の津波のとき、ぼくらはエビを獲る三角網(二個4000〜5000円で買える)を支援したけれど、今回被災した日本の漁民が必要な船は億単位だろう。そんな支援は簡単にできない。漁民が魚を獲るといふ原点はもつと単純で簡単なものだったはず。しかし、すべてが高度技術化して、大きな資本が必要で……というシステムに巻き込まれてしまっていたために、生活の再建はそう簡単にはいかないだろう。システムを変えようという発想にたつて、三陸でも小さな網で魚が獲れるんだよ、というようなかどうか。農業でも多分同じ。



大野和興 / おおの・かずおき

大野◎今、菅首相が復興構想会議をつくってやろうとしているのは、山を削って高台に鉄筋コンクリートの家を立てて、広い道路を通して車でさつと逃げられるようにして、港のところに水産加工場をつくって、潮をかぶった田んぼは三町一区画くらいの大区画にする。

る。そうすると小さな高齢農家なんかはとてもやれないから、外部資本が入ってきて、田んぼで大規模農業をする。そういうモデルをすでに考えていると思う。それに対抗する農業のあり方、小さい船で獲ってきた魚を小さい加工場で加工するという構想をぼくらが出すべきではないか。

村井◎小さい商売という例としては、アジアだったらこういうときには、勝手に屋台・露天商が動き出す。日本だとそれができない。

吉澤◎漁民も農民も都市に暮らす私たちも大きなシステムの中に位置づけられている。そんななかAPLA事務局では、正田さん(APLA共同代表)から最近提起された「百姓」ということはどういうことか、という話をしていく。色々なことができる百姓。その生き方を都会の暮らしに当てはめるとどうなるだろうか。ワークシェアリングのような形で、あまった時間を使って自分で野菜をつくりたりしてみるとか、ぼちぼちお金を稼ぎながら、生きる糧づくり別の次元で1人1人が取り組むというように、そういう世の中になつたらいいな、と。

噌を届けることができました。

外から救援物資を届けることで被災者の生活をつなぐことはできますが、被災者自身が生きていく意欲を取り戻し、歩き出すためには仕事が必要です。壊れてしまった地域社会のインフラや家屋、田畑などの復旧作業を被災者自身が有給の仕事として担い、地域を再建していく。そうすることで経済的、

精神的ダメージから立ち直り、歩き出すことができるはずですが(戦禍のアフガニスタンで農地に水を引く水路づくりに地元の人びとを雇って完成させた中村哲医師の考え方と同じです)。先日、テレビで辻本清美衆議院議員が同じことを発言していたので、政府がこの財源を確保し、早急に行に移してくれんことを期待しているのですが……。

声をあげつつつけること、そして代替エネルギーへの転換

福島原発事故の収束の見込みが立たない状態のなか、放射能被害は拡大しつつ、日本全体が被災地となりつつあります。政府には、放

この世界をどうつくりなおすか



吉澤真満子 / よしざわ・まみこ

廣瀬◎しかし都会だから、自分たちがつくるといふことは難しい、となると頼らざるをえない。消費者には産地・つくっている人は見えないことがほとんど。人間関係・交流が大事だと考えたから、これまでも生産者を呼んで話を聞いたり、産地に行ったりしてきた。

レポート Report

山形より
光のある未来を
自分たちの手で

足田美津子 / ひきた・みつこ
APLA共同代表、しらたかノラの会

地震の際、山形では大きな揺れはあったものの、白鷹町は丸一昼夜の停電だけで、ガス、水道も大丈夫でした。しらたかノラの会ではこの間、とにかく変わらず日常業務を続けようという

射能汚染の基準値の明確な発信と、それに基づく実害に対する補償と風評被害に対する補償の仕組みや手続きを確立し対応することが求められています。が、これまでの対応の遅さやさんざから言って、われわれの側から要求していく必要があります。

原発事故後も日本政府は今後のエネルギー政策の転換について言及することとはなく、何らの方向性も示していません。しかし、今回の事故で原子力エネルギーに依存することはもはやできないことがはっきりした以上、個人や組織、地域からでもその方向に歩み出すしかありません。私たちの会であれば、原発に頼らない農業が可能である

自分たちは、魚を獲ることはできない、牛も豚も飼えないなかで、どんな信頼関係を作っていくのか。これまで以上に各自が食べるものをつくることに関わりはじめていくことが大事だと感じている。

大野◎結局、小さな仕組みをいかにつくり出すか、そして、人、地域とつながるといふこと。そこから始まる。今日はどうもありがとうございます。この座談会がこれからの議論のきっかけになればと思います。(2011年4月7日、ATJ会議室にて)

ことで、味噌仕込みや餅加工、惣菜づくりに励み、宅配便が運休した3週間は新潟まで自前で物資を運び、そこから九州や大阪、東京に製品発送しました。4月に入ってからは春の作付けの準備、稲の種まき作業にも着手し、遅ればせながら例年と同じ農業の一年が始まりつつあります。

被災者が立ち直ることと地域の再建
同じ東北の太平洋側では地震と津波による未曾有の被害が発生し、福島原

ことを実際に示していくことが、原発のない未来を作り出す一歩になると思ふのです。チェルノブイリでは、日本のグループが菜の花を栽培することで土壌の放射能を除去し、その油を燃料として生産する活動を進めています。こうした取り組みやマイクロ水力発電(川や用水路などの水の落差を利用した発電)など、私たちにもできる代替エネルギーへの転換に向けた取り組みを検討したいと思っています。政府や東京電力に対し要求する行為を絶やさないと同時に、光のある未来を自分たちの手で少しずつでもつくり出す行動を始めるほかはないでしょう。■

(注)菜の花には放射性物質を吸収する性質がある。

レポート Report

フィリピンより
タルタルの丘から

大橋成子 / おおはし・せいこ
APLAフィリピン担当スタッフ

4月。今年もネグロスでは静かなホーリー・ウィーク(聖週間)を迎えた。カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)の隣にあるラ・グランハ村では、恒例の「タルタル」十字架に釘付けさ

れるまでのイエスの受難劇が催された。そのミサでは、日本の大震災の犠牲者に対する祈りも捧げられた。

3・11以後、フィリピンでは

3月11日に起きた悲劇を、これまで幾度も大きな災害に襲われてきたフィリピン人は、他人事ではないと心配した。テレビで映し出される地震と津波による被害を見て、ほとんどの人は2年前にフィリピンを襲った大

型台風オンディを思い起こしたはずだ。今回の津波の規模は比較にならないほど甚大だが、それでも当初は「日本なら早い復興ができるだろう」という願いもあった。

しかし、その後起きた原発事故で撒かれた放射能に対しては違った。「心配」は自分たちの生活まで幅を広げたのだ。翌日の日本政府の記者会見で「風は太平洋に流れるから日本は大丈夫……」という発言を受けて、フィリピンにも放射能が届くというマスコミの喧伝が広がり、マニラのいくつかの学校は閉鎖する騒ぎになった。

以来、フィリピンでは正確な情報なしに「放射能」という言葉がひとり歩きし、人びとに恐怖感だけを植え付けた。かつて海・空軍の米軍基地を抱えていたルソン島と違い、ネグロス島の人びとは、「核」の脅威に対して実感が無い。仲間の農民は、「放射能は毒のことか？」と問うたが、農民にとって「毒」は農薬のことであり、いつかは除去することができると思っていた。ところがその後、野菜や米、牛乳を売ることができなくなった農民のことで、30年以上にわたって土を作ってきた有機農家の自殺、避難して誰もいなくなった町を彷徨する牛や家畜たちの写真、汚染された海に怒る漁民、何十

この事態に自分たちができること

「最初に一番心配したのは、ぼくたちにチャンスを与えた人たちがどうなっているのかということ。ぼくたちが今ここにこうしていられるのは、日本のみんなとつながっているから」と答えたのは研修生のレネー。他の皆もテレビの映像にショックを受け、APLA関係者やKFIRCを訪問してくれた人、日本に出稼ぎに行っている近所の人たちの安否を心配し、起こった事態を悲しんだ。

農場スタッフのピンピンは「もしここで、日本で起きたように土地が全部水に流される被害にあったら、農業で食べている私たちは生きていけない。日本の農民も同じだと思う。だから、本当に行くところがなかったらネグロスに避難して来てほしい。他人事ではない」と声を震わせ、カルロス「もしこの事態がもっと近くで起こっていたら、自分が作っている野菜や食べものをあげられるが、これまで日本人たちに支えられてここまで来たのに、こうした事態に祈るしかできないことが情けなかった。でも、ここで一生懸命に野菜をつくって、KFIRCを運営し、将来ここに避難する人がいたと

年も安全に暮らせない放射能汚染のことを聞いて「あまりにもひどい。どうして人が作ったものを人が始末できないのか？」と怒りだし、私たちは押し黙ってしまった。

フィリピン・エネルギー事情

前述した2年前の大型台風オンディの被害は数県にまたがり、マニラ首都圏まで未曾有の洪水に見舞われた。しかしこれもあきらかに人災であった。住民の反対を押し切って建設されたサンロケダム(日本の国際協力銀行が800億円融資し、発電部門の事業会社へは丸紅や関西電力が出資の水を周辺住民に予告すること



あたり一面広がる見慣れた砂糖キビ畑。

なく「マニニアルに從がって」放流したことが原因だった。サンロケダムや周辺に連なるいくつものダムは森林伐採や、先住民の土地を侵して建設されており、その電力は中央マニラや各地方都市に送られている。フィリピンの電気料金は生活費に占める割合がかなり高い。しかも石油とともに年々値上がっている。台風直後に、さもあらざりと言わなければならない。原簿輸出に触手を伸ばしたのは韓国だ。

ルソン島・バターンには、「史上最大の無駄」と言われた原発の廃墟が残っている。第一次石油ショックに際して、1976年に総工費23億ドルをかけて米国ウエスティングハウス社により原発の工事が着工された。マルコス前大統領による戒厳令時代である。84年に完成したが、当時のマルコス独裁政権反対を唱えるピープルスパワーによって凍結され、政権崩壊後は国

東日本大震災、そして原発事故について思うこと

カネシゲファーム・ルーラルキャンパスにて

2011年3月11日に起きた東日本大震災を受けて、フィリピン・ネグロス島のカネシゲファーム・ルーラルキャンパスの研修生やスタッフたちはどんなことを考えたのか。(2011年4月12日 KF-RCにて)



座談会に参加してくれた研修生たち。

きに、受け入れられるようにしたい」と思いを語った。研修生ジェップジェップも「今までフィリピンや様々な国に支援してきた日本に対して、支援の手が差し伸べられているけど、自分たちには何ができるだろうと考えた。自分分はここでしっかり頑張り、日本への恩返しをしたいと思う」とそれぞれが考えたことを話してくれた。

電気がなくても生きていける!?

大地震や津波の被害のほか、福島第一原発で起きた事故についても聞いてみた。「地震や津波の被害は、甚大と

際検査チームが「地震発生時の恐れがある断層近くに建設されているため稼働不可能」と宣告し、以来一度も稼働せず現在に至っている。それは良いことだった。しかし莫大な借金がその後国民に押し付けられた(政府発表では2007年に返済を完了)。

その原発を再開するか、新たに建設するかの議論が活発化した矢先に、今回の福島原発事故が起こった。「日本や米国並みに安価でクリーンな電力を」と宣伝してきた国会議員・官僚たちの目論みはすぐに撤回はされないだろうが、人びとはもう騙されないだろう。

「ちよつと」の生活

タルタルの丘の下には緑一面のネグロスの田園が広がっていた。見慣れた砂糖農園とはいえ、その風景を本当にありがたい、と初めて心から思った。真つ青な空に向かって大きな深呼吸ができる。風は心地よい。「こんな当たり前のことができなくなるのか？」と先ほどの農民は言った。これまでは貧困の代名詞のように語られてきたネグロス島だが、多少暗くても、電気のない村があっても、「ちよつと」の生活ができればいい。今はこの自然の中で生きていけることだけでも感謝したい。

はいえ、一つひとつ復興していけると思うが、放射能は消えない「毒」だと聞いています。海を越えて、フィリピンまで届く恐れがあり、自分たちの、そして世界の問題でもある「小さな子どもたちが一番放射能の影響を受けるとテレビで言っていた。日本の技術で一刻も早く、これ以上拡散しないようにお願いしたい」という意見があがった。しかし、放射能に関して更に詳しく話を聴くと、ほとんどの人が、日本に住む私たちが原発事故前にそうであったように、それがどういふものか理解できているのが現状だった。

マルコス独裁政権時代、フィリピンでも原発建設が進められて、1986年の政権交代後、計画はストップした。しかし、20歳前後の研修生たちはその事実すら知らない。「もしフィリピンに原発をこれからつくるとしたらどうするか？」と質問すると、全員が「嫌だ。怖い」と答えた。「電気がなくても生きていける。ここはしょっちゅう停電だ。電気のために命を捨てたくない」「日本の人たちも、電気がなくなると十分生きていけるといふことを、ネグロスに来てぼくたちと一緒に生活してみればいい! 電気がなくて、テレビがなくても、みんなが歌を歌えばいいんだし。ラムポンプ(自動揚水器)とパイオガスがあればいい(笑)」。

フィリピンで原発をつくる計画が再浮上していった場合、ガソリンが1リットル50ペソ(約100円)以上もする暮らしのなかにあるフィリピンの人たちは、福島での原発事故がなければ、それを鵜呑みにしてしまっただけかもしれない。しかし、「今回の原発事故は自分たちの目を開かせてくれた」とみんなが口を揃える。KFIRCでは、食料だけでなく、エネルギーの地域自給もめざそうとしている。これからは、その意味が一層大きいものとなるだろう。(聞き手: 秋山真見 まどめ編集部)

このコーナーは「KAJA」のメンバーの方たちに交代で書いていただいています。

03

まだまだ 韓流

06

津留佐和子 / つる・さわこ
KAJA (Korea And Japan Alternative learning group) 会員



KNTVにて
5月16日(月)一挙放送スタート
5月16日～25日:毎週月～水 午前10時45分～午後0時(正午)
5月30日～ :毎週月～金 午前10時45分～午後0時(正午) ※曜日変更

金を自当てるに市が主催するミス・イ

シ・ミレは、借金返済のため、賞
地方都市仁州市の秘書室に勤める
シ・ミレは、借金返済のため、賞
シ・ミレは、借金返済のため、賞

ラフノメで描くユニークな政治ドラマ『シティーホール』
今回は、爆笑とロマンスと涙で綴
られた政治の世界『シティーホー
ル』(2009年・SBS・全20話)をお勧め
します。このドラマは、『パリの恋
人』『ブラハの恋人』など「恋人」シ
リーズの名コンビ脚本キム・ウンス
クと演出シン・ウチヨルによる異色
の名作です。下級公務員から市長を
めざす主役のシン・ミレには『私の
名前はキム・サムスン』のキム・ソ
ナ。相手役となる青瓦台(大統領官邸)
を夢見るクールな野心家チョ・グク
役には映画『リベラ・メ』のチャ・
スンウォンが扮し、二人の息の合っ
た演技は抜群で、見どころ満載のド
ラマです。
地方都市仁州市の秘書室に勤める
シ・ミレは、借金返済のため、賞
シ・ミレは、借金返済のため、賞

01

しらたか 更り 06

疋田美津子 / ひきた・みつこ
しらたかノラの会



福島県三春町の滝桜。4月半ば、地元の田んぼは
すでに耕され、稲作りの一年が始まっていた。

しらたかノラの会の商品が買えます。
お問合せ先0238・85・5675(めぐり屋内)

農業を軸に生計を立てようと仲間
11人で始めた「しらたかノラの会」
も今年で5年目を迎える。ここ山形
県白鷹町は山あいの地形で田畑の面
積も狭く、昔から米、野菜、養蚕、果
樹などを組み合わせた小規模複合型
の家族農業が営まれてきた地域であ
る。あるものを活かして、工夫を積み
重ねる地元の百姓の伝統にあやかつ
て、私たちも、無農薬で野菜や米を
栽培し、それを原材料にして加工し、
美味しくて食卓を豊かにしてくれる
製品づくりに励んできた。5年を経
て、百姓集団ノラが形になってきた。
そんななか、今回の震災が起こっ
た。同じ東北の太平洋側は地震と津
波で甚大な被害を受け、福島原発は
未だに収束の見込みが立たない。今
後の事態の推移によっては、放射能

汚染は福島県だけでなく日本全域、
さらには国境を越えてますます波及
していく。
今回の震災でわかったことは、原
発安全神話には根拠がないこと。原
発を管理する政府も企業も万全の体
制をとっていなかったところか、危
機対応能力に欠け、ずさんきまわ
らないこと。電力を安易に消費しなが
ら、原子力エネルギーの現実につい
てほとんどわかっていなかった自分
たちの無知。思考が追いつかないな
かでも言えるのは、原発に頼らない
暮らしを誰も足元から作り出し、
国内の原発をやがてはすべて廃炉に
していかなければならないことだ。
これ以外に光ある未来はない。
数年前に見た映画『六ヶ所村ラブ
ソデー』の中で、核燃料再処理工
場のある六ヶ所村の隣町で無農薬で
米づくりをしている農婦が田草取り
をしている姿が目につく。焼き付いて
彼女にとっても、福島県の農民にと
っても、私たちにとつても、これか
ら変わらざる種をまき、命を育て、
食を生産していくためには、原発に
頼らない農業と暮らしを自分たちで
作り出していかなくてはならない。
未来を共に作る百姓が一人でも多く
なることを願っている。
きみもまた この空の下 田草取り

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 06

『カッコーの巣の上で』 (1975年、米國)
【監督】ミロス・フォアマン 【出演】ジャック・ニコルソン、ルイズ・フレッチャー

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『カッコーの巣の上で』
発売元:ワーナーエンターテインメントジャパン株
式会社ワーナー・ホーム・ビデオ
価 格: DVD 1,500円、Blu-ray 2,500円(税込)

誰のために、何のために...
刑期中の強制労働から逃れるため
精神異常を装い、まんまと精神病院
に送致となった受刑者マクマーフィー。
行きついた病院では患者を巧妙に抑
圧し、管理する体制が敷かれていた。
清潔で整理の行き届いた病室では、
患者の意志を尊重した穏当な運営が
行われているかのようにだが、それは
病院の定める規律を犯さない範囲内
でしかない。ここでは「治療」を通
して患者たちを生気のない無気力な
人間に貶め、巧緻に支配している。
反抗的な行動や秩序を乱す行為をす
る者は「治療」の名のもとに徹底的
に矯正、無力化される。この体制を
確立し、患者や職員を指揮するのは
看護師長のラチェッド。彼女は絶対
的な権力者として院内に君臨する。
天性の自由人であるマクマーフィー
は、このありさまに反発する。彼は
この体制に抗い、ラチェッドを挑発
し、挑戦する。臆病であった他の患
者たちも彼の言動に触発され、次第

に勇気と自尊心を取り戻し始め...
この病院は一体どこにあるのだら
うか? 「ラチェッド」とは一体何者
なのだろうか? 「規律」「秩序」とは
何なのだろうか? そして「規律」
を強制し、「秩序」を強要する「権力」
とは何なのだろうか? また「組織」
は誰のために存在するのだろうか?
組織の当初の設立目的や本来持つ
存在意義は年月を重ねるにつれてし
ばしば失われ、消え去る。だが、そ
うした組織も存続そのものが目的と
なり、生きながらえることがある。
あたかも生存本能を持つかのように。
本来転倒であるが、その生存本能
は強力だ。既得権益にしがみつく者
は組織防衛のためには、どんな厚顔
な無恥も狡猾な不法行為も厭わない。
この病院で誰がどのような権益を
保持しているのか知れない。が、病
院が本来担うはずの社会的役割を見
失っているところが悲劇の出発点だ。
この映画でラチェッドは「悪役」
である。しかし立ち位置を変えて見
れば、彼女は「平和」を守る強力な
リーダーであり、彼女に抗うマクマ
ーフィーはそれを脅かすテロリストだ。
終止無表情のラチェッドは自らの
科せられた職務に忠実であるだけな
のかもしれない。彼女は何を守り、
誰のために働いているのだろうか?

02

むらを歩く 12

大野和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集長



福島県双葉町の志賀さん。

消えた村
初めて会ったとき、志賀一郎さん
は無精髭をなでながら、以前はきれ
いに剃っていたんですが、と照れた
ように言った。「以前」というのは
2011年3月11日のこと。東日本
大震災が東北・北関東を襲い、福島
第一原発が連続爆発を起こして暴走
を始めた日。
この日、志賀さんはすべてを失っ
た。妻、孫、自宅、田畑、そして63
年間生きてきた故郷。お孫さんは昨
年11月に生まれたばかり。遅い初孫
だった。携帯電話に写真が残ってい
る。見せてくれた。まるまるとした
赤ん坊が笑ってこちらを向いている。
涙が溢れ出して話が聞けない。我な
がら記者失格だなと思った。
11日、志賀さんはイベントに野菜
を運ぶために出かける途中だった。
そこへ地震と津波。引き返したが家
は消えていた。息子夫婦も駆けつけ

探したが見つからない。そして退避
指示。またすぐ探しに戻るつもり
でそこを離れた。志賀さん宅は海岸
から500m、第一原発から3.5
kmだった。
40年間、米を作ってきた。借地10
haを入れ、12haの稲作を手がけてい
た。安全な米作りをめざし、農業・
化学肥料を控えた環境保全型農業を
追求してきた。宮々と土を作った
田んぼに、もう入れない。まだ
1000万円の借金が残る農機も流
された。残ったのは、その日乗って
いた軽トラだけ。これが全財産だ。
軽トラにいつも乗せていたものが
ある。一昨年、大阪で開かれた米の
食味品評会でもらった金賞の表彰状
のコピー。大事そうに取り出して見
せてくれた。40年の手だれ米作り百
姓の唯一の存在証明。志賀さんには
これしかない。
今、志賀さんは郡山の有機米作り
仲間の家に身を寄せている。ここで
米作りを手伝いながら、避難解除に
なったら妻と孫を探しに戻るつもり
だった。だが、原発から今も流出し
続ける放射能は、その望みも断ち切
った。「田植えが終わったら恐山に
行って妻に逢い、気持ちを切り替え
なければ」と、今は自分自身に言い
聞かせている。

この度は、東日本大震災でお亡くなりになられた方々に心より哀悼の意を申し上げます。また被災された方々にお見舞い申し上げます。

2011年3月11日の地震発生後、APLAの仲間たちからは次々にお見舞いメッセージが届きました。こうした海外の友人たちからの気持ちも、大きな支えになることを改めて実感しました。

フィリピン・ネグロスより

ヒルタ・カドヤ (写真)
レイ・テネフランシア
バジー・デマイシツ
エドウィン・ロベス



日本を襲った地震と津波のニュースをテレビで観て、胸が張り裂けるような思いと大きな悲しみを感じており、非常に心配しています。この痛ましい震災をみなさんが乗り越えられるように、祈っています。

被災し、負傷された方、友人やご家族を亡くされた方、家を失くした方に祈りが届きますように。そして、救援活動に携わっている人びとに、知恵と勇気もたらされますように。恐怖

と闘っている人びと、特にトラウマに苦しむ子どもたちが、愛と慈悲に包まれますように。

最後に、被災地にある皆さんがこの大変な惨事に立ち向かっていけることを祈っています。

フィリピン・北部ルソンより

グレッグ・ランガン (写真)
KEA / カヤパ・エコレレッジ協会



日本を襲ったとてつもない惨事で被災した友人のみなさんに對して、どんな慰めの言葉をかけていいかわかりませんが、わたしの祈りがみなさんに届きますように。

日本の人びとがもっている強靭さや回復力、優れた規律など

を考えると、きっと耐え難い今回の震災も乗り越えられると信じています。心からのお悔やみとともに。

トム・フェルナンデス (写真)
CORDEV (コルデフ)



皆、日本で起こった災害の影響に心を痛めています。

私たちの親愛なる友人・パートナーの皆さんに何が起こったのか、まだしつかりと理解できずにはいます。とても悲しい現状に對して、今、私たちができることは祈ることだけです。

インドネシアより

ハリ・ユリ (写真)
オルタナティブ・インドネシア社 (AINA)



この度日本で発生した地震による大災害のことを知り、とても悲しんでいます。

どうか、皆さんが無事でありますように。皆で祈っています。

そして、すべての被災者の方々に不屈の精神と現在の状況に立ち向かう強さが与えられますように。

東ティモールより

ダニエル・ペレイラ (写真)
オルタナティブ・ティモール社 (ATI)



私たちの友人であるすべての方々へ。

ここテリでも毎日テレビでNHKを観ています。この地震と津波で本当にたくさんの方が亡くなられ、多くの被災者の方が出ている現状を見聞きするたびに、皆さんのことを考えずにはられません。

コーヒー産地の仲間も、日本の友人たちの様子を心配して、電話で連絡をしてくれています。

どうか何かあれば情報を送ってください。

私たちはいつもそばにいます。神のご加護がありますように。

アントニータ・ドスサントス (写真)
KSI



この地震と津波でAPLAの皆さんに被害が及んでいないといのですが……。

日本の被災状況についてのニュースをテレビで観るたびに、とても悲しい気持ちになります。

この地震と津波で亡くなられたすべての人たちに安らかな眠りが訪れますように。

そして、神のご加護がありますように！

※このほか、パレスチナや韓国、オルタナティブ・ジャパン(AIJ)のコーヒーと一緒に取り組んでいるイギリスの団体などからもお見舞いメッセージが届いています。すべてのメッセージはこちらに掲載しています。 <<http://apla.jp/eq/message>>

【事務局だより】

Table with 3 columns: Date, Location/Event, and Description. Summary of office activities from February to April 2011.

事務局からお知らせ

- 以下の呼びかけに賛同・参加しました。
- 沖縄・意見広告運動 (第二期) 【賛同】
- “ニッポン農力向上&震災復興大作戦!” 緊急提言 【賛同】
- 福島原発事故緊急会議 【参加・賛同】
- 脱原発・新しいエネルギー政策を実現する会 (eシフト) 【参加】

『Beyond Borders』を立ち上げました ~ 3・11東日本大地震と原発災害を乗り越えるために ~

未曾有の大震災と原発事故をきっかけに、APLA、ATJはこれまでの活動・事業を通じてつながった国内外の団体との協働の輪を広げるため、特別サイト“Beyond Borders - consolidate your support for Japan”を立ち上げました。

- このサイトでは、今後、次のような情報を関係者間で共有します。
- 海外パートナーからの応援メッセージ、今後予定されているイベントを継続して日本の皆さんに紹介します。
- 国内でAPLA、ATJにつながる団体、個人が精力的に進めている支援活動や復興の様子を海外パートナーに知らせます。
- 海外パートナーも懸念する原発事故に関連する国内外の情報を発信、共有し、脱原発社会の実現をめざします。

- 日本語版 http://apla.jp/eq/
■英語版 http://apla.jp/eq/english-home

編集後記

今号の編集作業にとりかかった矢先、大震災に見舞われた。福島で原発が暴走を始めた。放射能が人に土に山に川に海に降り、野菜や牛乳が汚染された。これまでの社会の仕組みに疑問が突きつけられた。

東日本大震災から2ヶ月、座談会を開いてから1ヶ月がたった。その間、浜岡原発の停止が決まり、今は夏の電力供給をどうするかが話題になっている。経済をまわすため、暮らしを維持するための電力はどうしたって必要だが、いかにして持続可能で安心なエネルギーを作っていけるか。

震災から数日、暗澹たる非日常(その時点ではまだ)に身を置いていたころ、九州新幹線全線開業CMのことを教えてもらった。30秒ver.のキャッチコピーは「どうして立ち止まっているの?」「未来は明るいに決まっている」「新しいどこへ行くこう」。

ハリーナ HALINA

2011年 vol.02-no.12
2011年5月20日発行

編集長 大野和興

編集者 吉澤真満子、松田麻衣子

表紙写真 長倉徳生

デザイン・制作 十年舎

編集・発行 特定非営利活動法人 APLA (APLA/あふら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿 3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷 株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html